

五七五で描く
「動植物」たち

目次

序 「詩」の形式

五七五で描く「動植物」たち

- 一、 春から初夏の生き物たち、
- 二、 また、多種な昆虫類、その他。
- 三、 様々な川魚、鳥、その他、また、
- 四、 梅雨、夏、砂漠の生き物たち、その他。
- 五、 海の生物 1 海の生物 2
- 六、 多種多様な海の生き物たち、その他。
- 七、 アフリカ、オーストラリア、
- 八、 アメリカ、南米、アジア、森林、その他。
- 九、 ペット、家畜、虫、その他、また、
- 十、 身近な小鳥、様々な草花、その他。
- 十一、 哲学、歴史、人物、その他。

——あながき——

「詩」の形式

「詩」の形式について

詩は、今、まさに「危機的状态」に瀕しているという。もちろん、その理由としては、実に様々なことが考えられるかと思うが、その大きな理由の一つとして、どうしても「新しさや斬新さ」などを求めるがあまり、いわゆる「既成の形」を次から次へと変えていくという、そういう「自由」のなかにあるかと思う。もちろん、それは、それで大きな「意味も価値」をあるわけだが、しかし、一方、そのような「自由」のなかで、今度は、何をどうしたらよいのか？ その方向性を見失っているということである。

そこで、もし「形」というものを求めるとすれば、一体、どこに求めたらよいのだろうか？ もちろん、それは、各人がそれぞれその人なりの「形」を見つけ出さなければならぬわけだが、その一つの考え方として、われわれ日本人は、当然のことながら、母国語である「日本語」を使っている。だとすれば、その「日本語」の特性に最も叶ったところに「形」を求めるのが、まさに自然であるとともに、最も根源的な「形式」が、そこにこそ内在することにもなるのだろう。そして、われわれ「日本人」の特性に最も叶った「形式」というのは、言うまでもなく、それは、「五・七・五」という形になるわけである。つまり、「五・七・五」という形こそは、最も「日本語」の特性に叶った、最も根源的な「形式」になるということである。

それでは、中国の場合は、どうだろうか？ その歴史を見てみると、『詩経』が最も古いものであり、それは、ほとんど「四言古詩」という形式で書かれているものである。やがて、「五言古詩」や「七言古詩」という形式に移り変わり、そして、唐代に入ると、有名な「絶句」や「律詩」という形式が、いわゆる「定型詩」として確立することになるわけである。——そのような歴史を踏まえて、それでは、中国において、その「中国語」の特性に最も叶った「形式」というのは、一体、何かと問えば、それは、まさに「起承転結」の内容を持つ「五言絶句」や「七言絶句」であり、その「五言絶句」や「七言絶句」こそは、「中国語」の特性に最も叶った「形式」であるとともに、最も安定した、最も美しい根源的な「形式」になるということである。

一方、日本においては、長く「文字」のない「口承時代」がつづき、やがて、中国や朝鮮半島の「文化」とともに、いわゆる「文字（漢字）」が入って来たわけである。そして、その中国や朝鮮半島の「文字（漢字）」を使って、いわゆる話し言葉である「大和言葉」を、まさに「漢字」で表記するようになるのである。また、奈良時代には、中国の「漢文」や「漢詩」などを真似て、盛んに「漢文」や「漢詩」などを作ってみたり、また、例えば、『古事記』や『日本書紀』なども、すべて「漢文」（漢字だけ）で表記され、また、有名な『万葉集』なども、いわゆる「漢字一字が一つの音」を表す、まさに「万葉がな」で表記されていたのである。そして、平安時代に入ると、やがて、「万葉がな」から、例えば、「安」から「あ」、「似」から「い」、「宇」から「う」、「衣」から「え」、そして、「於」から「お」を生み出すという感じで、いわゆる「ひらがな」がつくり出され、その「ひらがな」と「漢字」とを組み合わせた「文体」で、話し言葉である「大和言葉」が表記されるようになるとともに、中国の「漢詩」に対抗した、日本独自の「和歌」が確立することにもなるわけだ。それが、いわゆる『古今和歌集』であり、その形式が、いわゆる「五・七・五・七・七」という形式になったのも、それこそは、まさにわれわれ「日本語」の特

性に最も叶った「形式」であるとともに、最も安定した、最も美しい根源的な「形式」になるからであろう。

それでは、その「五・七・五」という形式で、一体、何を表現するのか？ 例えば、和歌、連歌、俳句、川柳、狂歌、その他が、いわゆる「五・七・五」（或いは「五・七・五・七・七」という形式をとるわけだが、そのなかで、短歌、俳句、川柳が、今日でも幅広い底辺とともに、根強い人気を得ているものである。そして、短歌には短歌の、俳句には俳句の世界があるというように、それぞれ「独自の世界」を持っているものであり、それは、それでよいわけである。ただ、短歌でも俳句でも、一般に、「自然」（花鳥風月）は、素材であり、いわゆる「自然」（花鳥風月）そのものを描くというよりは、むしろ重点は、人間の「心」の方にある場合が多いのだろう。そこで、その「重点」を自分の方ではなく、むしろ「対象」の方に向けて、「自然」（花鳥風月）そのものを描いてみたら、一体、どうなるのか？ 本書は、そういう一つの試みなのである。つまり、動物なら動物の特徴をとらえて、その「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命」にふれるということに、重点を置くということである。また、なぜ、「三行」にするのかと言えば、それにはあまり深い理由はなく、一般に、その方が読みやすいということであり、また、旧かなづかいにすることによってこそ、初めて、日本語の「美しさ」にふれることができるということである。

それでは、『三行詩』とは、一体、どういうものであり、そして、俳句や川柳とどこがどのように違うのか、という問題になるかと思うが、結論から言えば、「三行詩」というのは、俳句でもあり、川柳でもあり、また、俳句や川柳では表現しにくいものをも表現でき得るものである。つまり、「五・七・五」の形式で、どんなものでも表現でき得るものであるとともに、俳句のように季語があってもなくてもよく、また、基本的には「五・七・五」の形式ではあるが、それが「五・八・六」のような形になったとしても、それがやむを得ない場合は、ある程度は、許容範囲になるということである。そして、この「三行詩」の最大特徴は、自分と対象とがある場合、重点は、自分の側よりは、むしろ対象の側にあるということであり、その対象の特徴をとらえ、その「姿」を生き生きと描き出すことによって、「ああ、なるほど、そうか」と、その対象の「本質」を浮かび上がせるところに、最大の特徴があるということである。つまり、最も大事なことは、対象の「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命」にふれるということなのである。

ちなみに、ヨーロッパにおいて、近世イタリアに発生した「十四行詩」という定型詩があり、それは、「四・四・三・三」の十四行でできている形式であるが、この形式は、音楽で言えば、いわゆる「交響曲」にも似たものであり、それぞれ「第一楽章、第二楽章、第三楽章、第四楽章」という形式になるとともに、いわゆる「起承転結」の内容をも持つ、いわば『交響詩』とも呼べるものではないかと思う。そして、この形式こそは、恐らく、数多くの形式のなかでも、最も完成度の高い、最も魅力的な「定型詩」になるのではないかと思う。

*

*

一、 春から初夏の生き物たち

土破るつちやぶ

春の芽生やはるめばえ

土筆かなツクシ

雪割りてゆき

黄花と咲くやきはな

福寿草フクジュソウ

梅の木でうめ

花の蜜吸ふはなみつ

メジロかな

山間でやまあひ

鳴くやな

鶯うぐひす
谷渡たにわたり

春一番はる

嫌はれ者やきら

杉花粉スギ

花見れば

心の奥ぞ

騒ぐなり

隅々まで

咲かせて見せるか

桜の木

春の夜に

桜花吹雪の

花の宴

菜の花や

飛び交ふ虫も

楽しげなり

彩色に

咲く蒲公英や

道の端

春摘みて

七草粥がゆの

願ねがひかな

耳許みもとで

齋なつなを振れば

春の音色おと

老し母おいの

土手どてで摘みしや

ハコベかな

燕カフの葉はに

黄色きいろく咲くや

スズナかな

野はらの原で

四つ葉探さがすや

指ゆびの先さき

シロツメの

茎くきを編あみてや

花飾はなかざり

ひらひらと

虚空こくうに舞まふや

胡蝶こてふかな

舞まふ蝶てふも

昔むかしは毛虫ケムシと

呼よばれけり

ひたすらに

上うへへと歩あむか

天道虫テンタウムシ

何なによりも

蟻アリ巻マキ好キむと

天道虫テンタウムシ

天道追ふ

蟻へは甘露

アブラムシ

梅雨入りて

鳴くや田んぼの

蛙かな

田植後の

水にはやがて

オタマかな

葉の上に

姿ちよこんと

アマガヘル

紫陽花に

光る模様や

カタツムリ

子供らの

願ひ背に跳ぶ

蛙かな

危うしと

蜥蜴は尻尾を

切つて逃げ

動き廻る

尻尾や蜥蜴の

置き土産

ペロペロと

舌出すへびの

品定め

宵待ちて

妖しく飛び交ふ

蛍かな

五月うるさ蠅いと

追おはるる蠅へも
生命いのちなり

耳許もとで

囁はく羽音おとに
夢も醒さめ

夕暮ぐれに

飛とび立つ影かげや
蝙蝠カウモリか

蝙蝠カウモリや

超音波てうおんぱ発し
闇やみに舞まふ

洞窟どうくつや

闇やみに蝙蝠カウモリの
聲こゑぞ舞まふ

共喰ひも
朝飯前の

カマキリか

動き止め

獲物を待つか

鎌の脚

棒を手にて

蜂の巢落す

子供かな

蜂の巢に

手は出すなど

親の声

一撃は

目を狙ふか

スズメバチ

断りなく
座敷を歩くか
蟻の群

餌求め
彷徨ふ蟻の
先兵か

総ては
一匹からか
蟻と蜂

石炭紀

すでに栄えし

ゴキブリか

姿見れば

ゴキブリ憎しの

顔の色

事^{こと}あらば

すぐに丸^{まる}まる

ダンゴムシ

弱^{よわ}虫^{むし}と

仲^{なか}間^まを笑^{わら}ふか

ワラヂムシ

知^ちらぬ間^まに

落^おち入り疏^{もが}くも

蟻^{アリ}地獄

落^おち入りて

もがけば深^{ふか}まる

蟻^{アリ}地獄

儂^{はかな}くも

舞^まひ狂^{くる}ふ虫^{むし}や

蜻^{カゲ}蛉^{ロフ}か

モクモクと

穴掘るモグラの
孤独かな

地上へと

彷徨ふ土龍も
恋がため

巢戻りて

雛に鳴かるる
燕かな

休みなく

飛び交ふ燕も
雛ゆゑか

古き巢に

戻るや燕の
里帰

網あみを手てに

フナやハヤ捕とる

川遊あそび

ザリガニを

手てにして笑わらふ

子供こどもかな

鮒ふなつりは

子供こどもの頃ころの

故郷ふるさとか

泥どろに棲すむ

泥鱸どろやうも呆あきるる

汚染ひじさかな

川底せこで

変動へんどう察知さつちの

鯰なまかな

二、
多いろ種いろな昆虫類・その他

石どけて
触れば怒る

ハサミムシ

意外にも
卵世話する

ハサミムシ

捕へては
毒で餌刺す
ムカデかな

ムカデさへ
驚くヤスデの

脚自慢

ゲヂゲヂを
風呂場で見るや
長き脚

ゴキブリの
空飛ぶ姿や
ゲンゴロウ

雀捕る
籠の仕かけも
懐かしや

雨降れば
土這ひ出るや
蚯蚓かな

熱帯夜
蚯蚓も呆れて
土を出る

チーと鳴く
地中の虫や
オケラかな

畳目に

昼間は潜むか

夜の蚤

爪と爪

合はせ潰すや

蚤退治

絨毯の

下で巣くふや

家のダニ

皮膚炎も

起すや血吸ふ

家のダニ

頭から

虱退治と

DDT

水に浮く

脚あしで泳ぐや

アメンボ

くるくると

急おそぎ泳ぐか

ミツスマシ

腹はらの下した

空気溜ため泳ぐ

ガムシかな

尻うしか浮べ

空気取る虫

ゲンゴロウ

身を枝えだに

似せて襲おそふや

ミツカマキリ

泥どろかぶり
前脚まへあし振ふるるか

タイコウチ

鎌脚かまあしで

一いっ気に襲おそふや

タガメかな

雄オスの背せに

卵タマゴを産うむや

コオヒムシ

差さし口くちで

体液たいじつ吸すふも

タガメかな

粕喰かすくらひ

幼貝おとこと産うむや

田螺タニシかな

外灯ぐわいとうに

飛び交かふ姿すがたや

夏なつの虫

卵たまご負おふ

雄オスの姿すがたぞ

子こ負お虫ムシ

逆さかさまで

餌えさ捕とり泳およぐ

松藻マツモ虫ムシ

水中みづに

潜もぐりて産うむや

アメンボ

食欲じんよくに

生餌いきえさ喰くふや

水みづの水ヤ蠹ゴ

木の上で

昼寝ひるねするとや

夏なつの虫

葉屑はくづ食べ

育つ幼虫

地虫ぢむしかな

大アゴを

広げ怒いかるや

クハガタ虫

大きさを

誇るほこるや日本の

大クハガタ

他のた虫を

投げ飛ばすつの角や

カブト虫

最大と

その名も高し

ヘラクレス

難敵も

長き一角で

ひと投げか

大き角で

難なく飛ばす

アトラスか

森の夜

樹液に群る

夏の虫

甘き液

争ふ虫の

闘争かな

亀虫カメムシや

捕とらへて見れば

手の臭におさ

蜜蜂ミツバチや

踊まはり廻まはるも

蜜みつの場所

運はこぶ葉はで

キノコ培養ばいやうの

葉切ハキリアリ蟻

糞玉フンタマを

脚あしで運はこぶや

糞転フンコロがし

フアーブルや

虫むしに魅ませられ

昆虫記

竹節虫ナナフシや

そこまで似にせる
擬態ぎたいかな

動き出せば

枝えだから虫への
尺取虫シヤクトリムシ

尺取りとて

歩むもやがて
舞ふ蛾ガかな

竹筒たけづつに

巢造つくりするや

葉切蜂ハギリバチ

葉細工ざいくの

巻葉まきはに産むや

落文オトシフミ

芋虫イモムシも

やがて変身へんしんの

アゲハかな

桑クハの葉を

食べて糸吐はく

蚕蛾カヒコかな

蓑みのの中

雌メスは飛とべずに

雄オスを待つ

桑クハの葉を

絹キヌと変かへるや

蚕蛾カヒコかな

アブ舞まひて

子供こどもら騒さわぐ

プールサイド

網張りて

獲物を待つか

蜘蛛の糸

雌蜘蛛に

打診をするや

糸の揺

扉開け

素早く狩るや

戸立蜘蛛

天敵は

キノコと笑ふ

戸立蜘蛛

子供らの

蜘蛛が闘ふ

棒の上

三、
様々な川魚・鳥・その他

溪流や

イハナも透ける

水の音

水飛沫

上げて落下の

滝の音

溪流の

流れも速し

ヤマメかな

故郷の

川で閉ぢるか

鮭の旅

山間の

流れも清き

山葵かな

ニジマスを

親子で釣るや

キャンプ場

縄張を

争ふアユの

友釣か

中流を

ハヤと泳ぐや

ウグヒかな

その沼の

主ともなるや

野鯉かな

子供らの

釣の相手か

ハヤとフナ

湖水みづうみに

ボート浮うかべて

狙ねらひ魚

ヘラブナや

釣りつりては離はなす

水みづの中なか

氷湖ひよこにて

糸いとを垂たらすも

公魚ワカサギ釣り

貝なまこの中

さつと卵らん産うむ

タナゴかな

サハガニを

石いしの下したに見みる

嬉うれしさや

鶯うぐひすに

卵抱だかすや

杜鵑ホトトギス

大口おほぐちを

開あけて餌奪ゑさふ

ひなの策

養母やうぼより

大きなひなの

杜鵑ホトトギス

子育そだてを

鶯モスにさせるか

閑古鳥カンコドリ

カツコウと

鳴なく聲聞こゑくや

森もりの朝あさ

赤啄木鳥や
木突き餌捕る

長き舌

瑠璃の巢に

わが子頼むと

十一か

巢立する

ひなを見守る

親鳥か

溪流の

高木で鳴くや

大瑠璃か

鷹狩の

妙技見せるは

蒼鷹か

春に来て

雛鳥ひなどり育てる

サシバかな

断崖つくりに

巢造つくりするは

イヌワシか

大空おほぞらから

一気いっきに襲おそふや

鷲ワシの舞まひ

飛ぶ虫むしを

超速はしよくで捕食ほしよくか

雨燕アマツバメ

その速はやさ

正ただに燕ツバメ返しかえしの

早技はやわざか

天然てんねんの

川すに棲すむとや

大山オホサン椒セン魚セウ

水みづ辺べ来来て

卵タマゴを産うむや

山椒サンセウ魚ウラ

赤あか腹はらで

泳およぐ姿すがたぞ

井守井モリかな

親おとの後あと

腰ふ振おり追おふも

家鴨アヒルの子

田なかの中なかに

すつと立たつや

白サキ鷺サギ

逆立ちて

餌を求むや

鴨の漁

小波の

水面に浮ぶ

対の鴨

冬空に

V字飛行の

真雁かな

不忍の

池に遊ぶや

渡り鳥

冬空に

白鳥舞ふや

雪景色

鴛鴦フシドリと

呼なばるる仲なかぞ
怪あやしけれ

対つとなる

儀な式なや鳴なき合あふ
鶴ツルの舞

不ふ凍となる

川むで眠むるや
鶴ツルの群むれ

空そらに向むけ

鳴なき合あふ鶴ツルの
白しろさかな

冬ふゆ山やまに

雪ゆきより白しろし
雷ライ鳥テウか

四、

梅^つ雨^ゆ・夏・砂漠・その他

網アヤメ

脈シヤウブの

カキツバタ

咲き匂ふ

花シヤウブの

華の宴

雨に濡れ

咲く紫陽花ぞ

匂ひ立つ

尾瀬に咲く

白き麗姿の

水芭蕉

瞑想到

耽る達磨か

座禪草

山野さんやにて
網目あみめ模様もやうの

アヤマかな

葉脈はふと太ふとく

麗花れいと咲さくや

ハナシヤウブ

水辺みづべにて

咲さき匂におふ花はなぞ

カキツバタ

舞まふ蝶ちふも

羽根はねを閉とぢれば

木の葉はなかな

樹液じゆ求もとめ

柵くさきに舞まふか

オホムラサキ

朝早く

笑顔と咲くや

朝顔か

白昼夢

見るや浜辺の

昼顔か

夕暮ぐれて

咲き匂におふ花ぞ

夕顔か

行き交かふも

ゆかた姿すがたの

あさがほ市

風鈴ふうりんの

音も涼すずやかや

ほほづき市

夏の夜の

夢とぞ咲くや
花火かな

伝統の

意気に躍るや
夏祭り

伝統の

心魂を担ぐや
熱き肌

一夜だけ

咲いて見せるか
月下美人

炎天下

咲く向日葵や
夏の顔

雄壮な
武者と跳ねるや
ねふた祭

竿灯の
燈りも躍るや
夏の夜

山形や
花笠をどりの
熱き夜

七夕や
出逢ふ宿命の
男女かな

夏の夜を
踊り明かすや
阿波をどり

だんじりや
男をとこが走はしる
花道はなみちか

花道はなみちと
男をとこが走はしる
だんじり祭

縁日えんじちや
亀カメもひよこも
姿すがた見せ

楽たのしみを
追おひ掬すくふ手てには
金魚キンギョかな

お祭まつりや
匂におひも懐なつかし
屋台やたいかな

夏眠かみんする

口を濡らせば
動く殻から

班蝥はんめうや

人の前へと
道しるべ

驚けば

下に落つるか
蠅取蜘蛛へトリグモ

蜘蛛クモ狩カの

専門スペシヤリスト家カか
亀甲蜂ベツカラバチ

カナブンや

顔にぶつかる

夜の道

夏草なつくさや

鳴き盛なる聲こゑぞ

キリギリス

ヂーヂーと

鳴く聲こゑ暑あつし

アブラゼミ

ミンミンと

鳴き入こゑる蝉せみや

盆ぼんの入り

盆ぼん過あぎて

ツクツクボフシの

聲こゑ高たかし

鳴く蝉せみや

明日あすはなき身の

激はげしさか

草叢くさむらや

逃げる飛蝗バツタの
高飛たかとびか

群むれて飛とぶ

飛蝗バツタの襲来
術すべもなし

稻刈かりに

追おはるる稲子イナゴの
高ハイジャンプ

翡翠カハセミや

水辺うをで魚捕る
巧たくみかな

七草ななくさの

葉陰はかげで鳴なくや
秋あきの虫むし

一滴の

水さへ逃さぬ

仙人掌か

棘の葉や

砂漠に生さん

草の智慧

砂漠にて

咲く仙人掌や

水の花

尾を武器に

砂漠に生きる

サソリかな

尾部上げて

敵に毒刺す

サソリかな

砂漠にて

生命運ぶや

駱駝かな

悠久と

歩む駱駝や

絹の道

東西の

文化運びし

駱駝かな

ゆつたりと

歩む駱駝や

砂の上

重き荷を

運ぶも驢馬の

強健かな

熱砂にて

手足躍らす

カナヘビか

ゴミムシを

ひたすら走らす

暑さかな

鎧着て

巢穴に棲むや

アルマジロ

塚襲ひ

舌で舐め尽す

大蟻食

動くなど

動けば襲ひ来る

ガラガラ蛇

五、
海の生物
1

護岸ごがんにて

騒ぐさわ子供こどもの

ハゼつりか

投げ釣づりや

カレヒシロギス

釣るはまべ浜辺

浜辺はまべにて

シロギス釣づるや

長ながき竿さそ

磯釣づりや

イシダヒ狙ねらふ

仕掛しかけかな

波寄なみせる

磯辺いそべで釣づるや

メジナかな

藤壺フチツボや

岩場に巢すくふ

磯いその殻から

岩場いわばにて

海老エビが好みと

真鯛マダヒかな

岩いわに似にせ

背せビレに毒どく持もつ

カサゴかな

身みを守まもる

思おもひの果はや

海胆ウニの棘とげ

海うみの底そこ

泥砂どろすな飲のみ込こむ

海鼠ナマコかな

暗^{くら}き夜^{よる}
浜^{はま}へと歩^{あゆ}む
海^{うみ}ガメか

目^めに涙^{なみだ}
浮^{うか}べて産^うむは
生^{いのち}命^{めい}かな

殻^{から}破^{やぶ}り
海^{うみ}へと走^{はし}る
子^こ亀^{かめ}かな

空^{あき}殻^{がら}の
間^ま取^とり測^{はか}りて
宿^{やど}借^{かり}か

宿^{やど}借^{かり}や
殻^{から}捨^すて殻^{がら}への
新^{しん}居^{きよ}かな

砂底すなぞこを

泳ぐおよや鰐エビの

貝漁カヒあさり

海うみの底そこ

色変いろへ潜ひそむ

ヒラメひそかな

鯉ヒラメとは

逆目ぎやくめで競まさふ

鯉カレヒかな

穴見あなれば

好このんで入いる

穴子アナゴかな

突然とつねんと

飛び出とて襲おそふ

ウツボおそかな

蛸壺たこつぼや

入りて一夜の
安らぎやすか

迫る敵てきに

浴あびせ逃にげるや
蛸タコの墨

墨すみ吹ふいて

逃にげるが勝かちと
蛸タコの舞

水みづ吹ふきて

泳およぐや烏賊イカの
迅速はやかな

烏賊イカ釣つりて

水みづを浴あびるや
笑あみの顔

身を岩いはに
似にせるが余あまりの

鬼虎魚オニオコゼ

巻貝マキガイの

王ほことぞ誇ほこる

法螺貝ホラか

逃げ姿すがた

まるで入歯いりばの

帆立貝ホタテガイ

釣り上げつりあげに

腹はらも膨ふくるる

フグフグの顔かほ

足あしに来きし

痛みいたみや水母クラゲの

来襲らいしふか

揺れ誘ふゆ さそ

イソギンチャクの
触手かなしょくしゆ

クマノミや

卵守りてたまご
右往左往うわうさわう

貝喰ひくも

珊瑚も害すかサンゴ
海の星うみ

胃を外そと

出して喰ふやくも
海星かなヒトデ

血の匂にほ

嗅ぎて迫るやか
鮫の鰭サメ

一撃でいちげき

引裂き喰ふひきさく

鮫の顎サメ
アゴ

他の魚をた
うを

連れて泳ぐやおよ

甚兵衛鮫ジンベエ

大物のおほもの

威を借り泳ぐかおよ

小判鮫コバンサメ

悠然といんぜん

巖つい顔やいかに

ナポレオン

稚児倍良チゴベラ

掃除頼むとたの

寄る魚かよ

砂吹きて

餌をあさるか

フグの技

丸でなく

角にこだわる

ハコフグか

ハコフグや

ひれ泳ぎするも

たよりなく

飛魚を

追ひかけ廻す

シイラかな

その姿

まさに一振の

太刀魚か

海うみに躍をどる

カジキと人ひととの

死闘しとうかな

回くわい遊いうが

生命いのちと泳およぐ

マグロまぐろかな

海豚イルカとは

やがて言葉ことばを

交まじす仲なか

追おひ込こみて

音発おとするや

シヤチしやちの漁り

広ひろき海うみ

悠久ゆうきうと泳およぐ

鯨クジラかな

愛らしく

泳ぐ海豚やイルカ

芸の雄ゆう

肢吻であしぐち

巧みに芸するたく

海驢かなアシカ

芸をする

シヤチも可愛い

水しぶき

水しぶき

浴びて喜ぶあ
よろこ

人とシヤチひと

石を持ちいし

腹で貝割るはら
か

獵虎かなラッコ

マンバウや

ゆつたり泳ぐおよ

とぼけ顔

水に棲むす

生命と出逢ふやいのち

水族館すいぞくくわん

鸚鵡貝アウム

進化忘れし

古姿かなすがた

泥底をどろぞこ

戦車と動くやうご

カブトガニ

時を超えとき

生ける化石やい くらせき

シーラカンス

六、
海の生物
2
その他

潮干狩しほひがり

家族で掘るやかぞいでほ

海の幸うみのさち

有明ありあけの

干潟で遊ぶやひがたあそ

陸五郎むつごろう

陸五郎むつごろう

泥から顔出すどろかほ

眼かなまなこ

背びれ立せびれた

縄張り争なはばあそ

陸五郎むつごろう

跳沙魚とびはせ

身を振り跳みふは

誘ひかなさそ

大バサミ

振つて誘ふや

潮招

跳び廻り

貝エビ喰ふ

トビハゼか

ワラスボヤ

素早く潜る

泥の中

波に揺れ

水辺歩くや

浜千鳥

雛守る

擬態得意な

千鳥かな

密ひそやかに
真珠しんじゆ育てる

阿古アコヤ屋貝

赤したき舌

出して動うごくは

馬鹿バカ貝か

馬鹿バカ貝や

素早すばやく潜もぐる

砂すなの中なか

驚おどろけば

後ろうしろに跳はねる

海老エビの舞

その甲羅カブラ

見れば確たかに

平家蟹ヘイケガニ

海に舞ふ

白き麗姿ぞ

鷗かな

飛び交ひて

巧みに餌捕る

鷗かな

空中から

一気に飛込の

アヂサシか

餌運ぶ

善知鳥狙ふは

海猫か

隼や

獲物を狩るも

体当

ぎこちなく

走りて飛ぶや

信天翁アハウドリ

ペリカンや

魚追ひ込み

掬ひ捕り

ペリカンの

大口に雛の

餌漁りあさ

降り立ちて

よちよち歩くも

信天翁アハウドリ

離島にて

海に飛込の

鯉鳥カツヲドリ

珊瑚の海
色彩競ふや
熱帯魚

色彩を
珊瑚の海で
競ふ魚

雄腹の
中から飛び出る
龍の子か

龍の子や
ダンス踊の
求愛か

何が為
そこまで細る
楊子魚

近海きんかいを

アチサバ泳およぐ
海の幸さち

飛魚とびうろや

追はれ窮余きゆうよの
一飛とびか

潮しほさかひ

群むれて泳およぐは
サンマかな

餌求えもとめ

回遊くわいうするも
カツヲかな

その姿すがた

泳およぐがための
マグロかな

干潟ひがたにて

餌捕りあそ込むは

カニの群むれ

追ひ込みて

宙に躍をどらす

シヤチの漁

華麗なる

姿すがたに似合はぬ

闘魚べたの舞

指切ゆびきりの

約束破やぶりか

針千本はりせんぼん

海鼠ナマコから

出入でひりするや

カクレウヲ

青白く
あをしろ

光るや波間の
ひか なみま

夜光虫
ヤウチユウ

龍宮の
りゆうぐう

遣ひも棲むや
つか す

深き海
ふか

餌喰ふ
くも

分厚い唇
ぶあつ くちびる

羽太の口
ハ タ くち

提灯で
ちやうちん

客寄せ喰ふ
きやく

鮫鱈か
アスカウ

深海や
しんかい

光も届かぬ
ひかり

闇世界
やみ

アザラシ
海豹や

まなこ
どんぐり眼に
すがた
這ひ姿

あが
島に上り

きつ
ハーレム築くや
オツトセイ

む
牙剥きて

きつ
ハーレム築く
セイウチか

てんてき
天敵に

お
追はれわれ先の
すがた
這ひ姿

うみべ
海辺にて

よこ
身横たふるや
トドの群

海の中なかに

自在と泳ぐおよ

ペンギンか

ペンギンや

胸張り歩くもある

よちよちと

抱卵ほうらんに

寢食忘るわす

皇帝くわうていか

氷塊ひょうくわいの

下で微笑ほほえむ

クリオネか

両極りやうきよくに

光彩ひかりのカーテン

オーロラか

七、
アフリカ・オーストラリア
アメリカ・南米・その他

百獣ひやくじゅうの

王と称わう したへらるる

孤独こどくかな

雄オス同士

闘たたかふ宿命さだめの

獅子シシたちか

狩かり終へて

樹上くわうじやうで喰くらふや

豹ヘウの智慧

獲物えもの決め

群むれで狩かりする

ハイエナか

ハイエナや

獅子シシと争あそふ

獲物えものわけ

アカシアの
枝葉好むや
麒麟かな

泥浴を
子象も真似る
水辺かな

水辺来て
もう一苦勞の
麒麟かな

敵の眼を
惑はす模様の
縞馬か

縞馬や
群て動くも
見張立て

草求め

猛進するや

ヌーの群

水しぶき

上げて渡るか

ヌーの群

溺れ死ぬ

ヌーを待つや

ナイルワニ

頭下げ

走るや犀の

地響か

見張立て

群を守るや

ミーアキヤツト

リカオンの
水辺走るや

狩の群

獲物追ひ
疾風と走る

チーターか

天敵に

追はれ走るは
インパラか

標的を

脚で仕留める

チーターか

空を捨て

走る駝鳥の

迅速かな

大口を
おほぐち

開けて怒るや
いかに

河馬の乱
カバ

水の中
なか

カバはごろりと
そだ

子育てか

草喰ひ
くさ

ここまで太るか

陸の河馬
カバ

雨降るを
あめ

泥底で待つや
どろ

肺魚かな
はいぎょ

歩き廻り
まは

獲物バタと踏む
あつもの

蛇喰鷲
へびくわん

チーターの

格好の獲物や

ガゼルかな

水よりも

陸を好むか

コビトカバ

驚けば

水から森への

逃げ姿

夕暮で

歩く掃除屋

ジャツカルか

秃鷲や

死肉に群る

黒き影

飛び跳ねが
何より得意と

カンガルー

顔を出す

子も跳ねるや

カンガルー

樹の上で

親におんぶの

コアラかな

根を喰ひ

巣穴に棲むや

ウオンバツト

密林の

奥にぞ棲むや

火喰鳥

バリカンで

何をするぞと

羊ヒツジかな

大人おとなしい

羊ヒツジも怒るや

丸裸まるはだか

逃にげ足あしや

エリマキトカゲの

立たち走はしり

土手どてに巢すを

掘ほりて卵らん産うむ

カモノハシ

カモノハシ

子供こどもは乳ちち飲のむ

平ひらの吻くち

走るモアの

駝鳥ダテウによく似た
絶滅種ぜつめつしゆか

地中の餌あそ

嘴突くちばしき捕とる

キーウイかな

駝鳥ダテウ似にで

泳およぎも得意と

走るはしレア

水辺みづべにて

飛とべず餌捕あそとる

クイナかな

麦畑ばたけ

荒あして採とめし

エミユーカーナ

水辺にて

獲物狙ふや

ジャガーの眼

アメリカの

大地で狩する

ピューマか

夕暮て

鳴き騒ぐ聲ぞ

草原狼か

スカンクや

敵に高飛車の

一発か

その悪臭

敵も呆れて

寄りつかず

アンデスの
ラクダと笑ふ

ラマの口

アルパカや

ヒツジも驚く
毛並かな

岩場来て

日向ぼつこの
イグアナか

イグアナや
海と陸とに

棲み分けか

象ガメや

進化の謎解く

歩みかな

川渡^{わた}る

牛^{ウシ}も骨^{ほね}と化^{くわ}す

ピラニアか

アマゾンや

地球^{ちきう}に酸^{さん}素^その

大密^{だいみつ}林^{りん}

人^{ひと}さへも

絞^{しぼ}め殺^{ころ}すとや

アナコンダ

ぶら下^さがる

木の葉^{くも}喰^くふや

ナマケモノ

水^{みづ}辺^べにて

泳^{およ}ぎは得^{とく}意^いと

カピバラか

八、
アジア・森林・その他

音もなく

舞ふ鼻フクノハや

闇やみの狩

鳴く聲こゑや

仏ブツ法ホフソウ僧ソウと

木コノ葉ハ木ツク兔

膜ひろ拈げ

夜よるに舞まふ影かげ

鼯ムササビ鼠か

身を丸め

眠すがたる姿すがたぞ

冬ヤマ眠マ鼠ネかな

モモンガや

樹きから樹きへの

飛すがたび姿すがた

水辺みづべにて
餌漁ゑさあさる手てや

アラヒグマ

狸タヌキでは

ないぞと見みせる

尾をの縞しまか

羽音はおと立て

花はなの蜜みつ吸すふ

蜂ハチドリ鳥か

ゆつたりと

泳およぐ姿すがたも

ナマケモノ

命日めいにちが

クリスマスかと

七面シチメン鳥アウ

驚おどろけば

仮死かしに瀕ひんする

狸タヌキかな

穴熊アナグマの

巣すを汚うばし奪うばふ

狐キツネかな

ピョンと跳はね

獲物えものを狩うるや

キタキツネ

川上のぼる

鮭サケを狩かりする

ヒグマかな

肥満ひまん児じと

肥こえて籠こもるや

穴熊あなぐま

水牛スイギウや

虎トラも退しりぞく

巨大きょだいの角つの

首くびもたげ

必殺ねら狙ねらふや

コブラの眼

一撃いちげきで

勝負しやうぶ決きめるか

マンガース

その瞬間とときを

色変いろへ待まちつや

カメレオン

羽ひる拡ひろげ

眼め一杯さいぱい誘さそふ

孔雀クジャクかな

岸^{きし}邊^へにて

日向^{ひなた}ぼつこの

鰐^{ワニ}の群

音^{おと}もなく

忍^{しの}び進^{すす}むや

鰐^{ワニ}の影

身^みを捻^{ひね}り

獲^{くわ}物^{ぶつ}喰^{くら}ふか

鰐^{ワニ}の口

鰐^{わに}口^{ぐち}の

粕^{かす}を喰^{くら}ふや

鰐^{ワニ}千^チ鳥^{ドリ}

恐^{きょうり}竜^{ゆう}の

面^{おも}影^{かげ}今^{いま}に

大^オ蜥^{フト}蜴^{カゲ}

泥沼どろぬまに

塗まみる足あしに

血吸チスヒベル蛭

山歩やまあるく

肌はだに吸つひ付く

山蛭ヤマビルか

煙草タバコの火

近ちかづけ落おとす

山やまの蛭ビル

尾おを枝えだに

巻まきて眠むるは

クスクスカ

妖あやしくも

巨きよだい大と咲はなく花

ラフレシア

夢喰ふ
獺も嘆くや

夢のなさ

実を巢へと

運ぶや栗鼠の

貯蓄癖

愛らしく

木の实喰ふや

栗鼠の口

有鱗に

子供背負ふか

穿山甲

長き舌

蟻をへろりと

穿山甲

虎の子や

猫とは違ふ

唸りかな

泥水を

浴びて楽しむ

水牛か

人さへも

襲ひ殺すや

猛虎かな

笹喰ひ

寝転び遊ぶ

パンダかな

可愛いと

レッサーパンダの

立ち姿

アルプスの
岩上に立つや

アイベックス

間を合せ

角ぶつけ合ふ

雄姿かな

山間に

砦と響くや

角の音

巢造を

樹上にするや

鶴

ジユゴン

人魚と見るや

海の旅

氈鹿カモシカや

岩場この好みて

山歩あるき

飛び跳はねて

岩から岩への

羚羊レイヤウか

馴鹿トナカイや

雪道ゆきみち走る

橇ソリの跡

氷河期ひょうがきを

巨象と生きし

マンモスか

マンモスや

亡骸なきがら残して

絶滅か

九、 ペット・家畜・虫・その他

足音あしおとに

駆かけ寄よる犬イヌや

扉ドガの向むふ

力ちから強つよく

人ひと引ひつ張はるや

散歩イヌ犬

しつぽ振ふり

摩すり寄よる犬イヌも

愛あいらしく

警鐘サイレンに

血騒さわぐ犬イヌの

遠吠とほぼえか

遠吠とほぼえや

仲間なかま呼よび合あふ

狼オホカミか

座敷来て

ネズミ捕つたと

騒ぐ猫

鼠捕り

今はそつぼの

昼寝かな

咽鳴らし

布団に入れろと

鳴く猫か

床の中

腹を枕に

猫いびき

木天蓼に

目のない猫の

乱れやう

鶏ニハトリの

夜明告つぐるや
一いちの聲こゑ

長鳴なきを

昔むかしは競まひし
鶉ウヅラかな

牧場ぼくぢやうで

ゆつたり草くさはむ
牛ウシの群むれ

牛ウシよりも

手て軽がるに飼かへて
山ヤマ羊キの乳ちち

粗食そしよくさへ

苦くにせぬ山ヤマ羊キの
強つよ靱さかな

走り出せば

後退知らずの
猪か

豚たちの

先祖辿れば
猪の子かな

風となり

原野を駆ける
天馬かな

勝利へと

走る宿命や
駿馬かな

すべてが

走る宿命の
駿馬かな

人知恵ちえを

カーカー笑わらふ

鳥カラスかな

鳥カラスより

真似まねは得意とくいと

九官鳥キウクワンテウ

厚あつき舌したで

巧たくみに真似まねる

鸚鵡アウムかな

飼ぬしひ主ぬしの

心こころぞ真似まねる

鸚哥インゴかな

雛鳥ひなを

餌え付けて手乗てのりり

文鳥ブンテウか

物喰くろふ
動作しぐさも可愛い

ハムスター

実験じっけんの
主役しゅやくとなるや

ラットマウス

人ひとがため
生きる宿命さだめか
モルモット

野のを駆かける

ウサギ襲おそふや
鷹タカの爪つめ

苛立いらだてば

わが子も殺ころす
兎ウサギかな

春告つぐる

花はなと咲はき句こふ

水仙スイセンか

越前えちぜんの

岸邊きしべに咲はくや

花水仙はな

池いけの鯉こい

餌えさに大口おほぐちの

群むらがりか

色彩いろあひの

妙めうと麗姿すがたの

錦ニシキゴロ鯉

水槽さうを

色極いろあま彩やかに泳およぐや

熱帯魚ねったいきよ

噛み附けば

二度と離さぬ

スツボンか

よく見れば

柔らか甲羅の

スツボンか

餌目がけ

群がり群る

鰻かな

長き筒

川底置くや

鰻捕り

可愛いと

買はれて家に

ミドリガメ

高き所たかところ
好むや山羊このやヤギの
顎の鬚あごひげ

頭下げあたま
可愛く乞ふやこ
奈良の鹿シカ

宮参りみや
鳩と遊ぶやハト
七五三

飛び廻るまは
空から降るやそら
鳩の糞ハトフン

陽の位置とひ
体内時計のたいない
伝書鳩でんしよぼと

ひたすらに

鳴く鈴虫スズメシの

羽の音色おと

馬追ウマオヒの

スイーチョンと

鳴く聲こゑか

木の上うへで

シリリと鳴くなは

ヤブキリか

秋あきの夜よに

鳴き透とほる音色こゑぞ

邯鄲カンタンか

キチキチと

鳴なきて跳とぶ虫

シヤウリヤウか

虫^{むし}たちの
交^{かう}尾^びや死^しへの
艶^{えん}舞^ぶかな

生^{いき}餌^え喰^くふ
水^や蠹^ごから羽^う化^かの
蜻^{とん}蛉^ぼかな

指^ま廻^はし
止^とまる蜻^{とん}蛉^ぼを
捕^とる子^こかな

色^{いろ}変^へへて
山^{やま}から里^{さと}へ
アキアカネ

秋^{あき}に舞^まふ
対^{たい}のト^とン^んボ^ぼの
水^{みづ}辺^べかな

草むらでくさむらで

鳴くコホロギヤなかくほろぎや

秋の歌あきのうた

ガチャガチャ

鳴き騒ぐ虫ぞなきさわぐむしぞ

クツワムシ

その音色そのねいろ

どこか似るよなどこかににゆるよな

カネタタキ

松虫まつむし

鳴く聲さびしなかくこゑさびし

チンチロリ

草かげで

命燃やすかいのちのちもえやすか

秋の虫

十、 身近な小鳥・花・その他

ヒヨドリの

ピーヨピーヨと

鳴なく秋あきか

夕暮ぐれに

群むれ飛とび騒さわぐは

ムクドリか

チーチーと

鳴なく聲こゑ高たかし

メジロかな

頬ほほ白しろや

一筆啓上

鳴なき申まうす

子育そだてが

何なにより得とく意いと

十姉妹じふしめい

高らかに
一聲鳴きて

モズの乱

枝先に

獲物晒すや

モズの癖

雉子鳩や

木の実に求めて

庭の先

群の中

リーダー発揮の

四十雀

活発に

動き廻るや

五十雀

柿^{かき}の実を

啄^{つば}む鳥や

ツグミかな

えつウソと

言^{こと}ひたい程^{ほど}の

美^{うつく}声^{こゑ}かな

フイフイと

笛^{ふえ}吹^ふく鳥^{とり}ぞ

ウソ^{うそ}の聲^{こゑ}

ゲエツと鳴^なく

聲^{こゑ}ぞ誠^{まこと}の

仏^{ぶつ}法^{ぽう}僧^{そう}

空^{そら}高^{たか}く

嘯^{ささ}り飛^とぶは

雲^い雀^はかな

花^{びら}辯^の
奥^{おく}に秘^ひめしや
薔^{バラ}薇^の心

深^{おも}き思^ひひ
奥^{おく}に秘^ひめし
薔^{バラ}薇^の花

甘^{にほ}き匂^ひ
放^{きま}ちて誘^ふや
百^{ユリ}合^の花

泥^{どろ}沼^{ぬま}に
咲^{スイ}く睡^{レン}蓮^や
池^{はな}の華

泥^{どろ}沼^{ぬま}の
浄^き土^のに咲^きくや
蓮^{ハス}の花

淑しとやかも

今は昔むかしの

撫ナデ子シヨか

サルビアの

花房はなぶさ含みめば

蜜みつの味

花はな匂におへど

根ねこそ恐おそろし

トリカブト

虫むし誘さそふ

葉はにぞ仕掛しかけの

蠅へ取とり草さウ

鞞うづほへと

蜜みつで誘さそふや

ウツボカヅラ

十一、 哲学・歴史・人物・その他

無知の知へ

誘ふ鰥エビや

ソクラテス

誘惑を

退け説くは

神の愛

真理のみ

愛し求めし

釈迦の空

わが道は

一も以て貫く

孔子かな

善こそは

人の本性せいと

説く孟子

われ思ふ

思ふ主体こそ

真我なり

考える

葦あしとぞなるは

問ふ心

地動こそ

真理と説くや

コペルニクス

宗教と

科学の狭間はざま

ガリレオか

望遠を

覗くのぞ彼方かなたに

大宇宙

引力や

月は落ちぬに

林檎リンゴ落つ

解つたと

裸で走るや

アルキメデス

地図見では

形かたちに驚く

ウエゲナーか

刷り込みを

舞ひなから学ぶ

ローレンツ

エンドウに

遺伝の法則

見し人か

何よりも

真知愛すや

ソクラテス

プラトンの

善とは何ぞ

三つの比喻

比喻の謎

解きて初めて

知る善か

洞窟の

火とは太陽の

光かな

学問を

体系づけし

アリストテレス

ランボーや

地獄の季節

見し人か

読む人を

虚無の世界へ

悪の華

マラルメや

美的言語の

極致かな

厳密な

思索が生命と

ヴァレリーか

人間とは

何とぞ問ふや

罪と罰

絵に憑かれ

炎と描くや

ゴツホかな

運命と

闘ひ続けて

歡喜かな

神死して

超人乞ふは

ニーチエかな

良寛の

童と遊ぶ

無垢の空

奥の道

求め深めし

芭蕉かな

原始の海
生命誕生の

奇跡かな

古生代

海で栄えし

三葉虫

藍藻や

地球に酸素の

光合成

海の王と

恐れられし

アリマロカリス

地上へと

プロロフイトンの

這ひ上り

背骨得て

海から川へ

ケイロレピス

中生代

地上闊歩の

恐竜か

始祖鳥や

大空へと翔る

一歩かな

アンモナイト

謎殻遺して

絶滅か

恐竜や

天変地異の

犠牲種か

猿見れば

人の先祖も

知られけり

雨降れば

頭に木の葉

オランウータン

胸叩き

感情誇示の

ゴリラかな

樹の上と

下とで分かれし

猿と人

染色も

人と極似の

チンパンジー

樹を下りて

歩き始めた

人への道

人が人と

なりし光や

知性かな

哲学や

根源知への

問ひかけか

パピルスに

歴史綴るや

人の智慧

何よりも

古書を愛すか

本の虫

読書とは
頭脳耕す

農作業

読書こそ

思考深める

王道なり

書を読まぬ

人に厳密な

思考なし

思考を

真に育てるは

読書かな

我思ふ

思ふ思考こそ

脳耕なり

真核しんかくへ

大変身のだいへんしん

細胞さいぼうか

微生物びせいぶつ

枯葉死骸かれはの

分解者ぶんかいしゃ

小魚こさかなや

浮遊動物ぶらんくどう喰くらふ

連鎖れんさかな

蘇よみがへる

生命いのちの不思議

ヒドラひどらかな

生命いのちとは

何かと問とへば

細胞さいぼうかな

潮吹きて

泳ぐ雄姿ぞ

鯨かな

大空に

自由謳歌の

鷺の舞

竹林に

孤高愛すは

猛虎かな

風雲を

呼びて天へと

昇り龍

空に向け

愛を告ぐるや

鶴の舞

乱世らんせいを

智勇ちゆうゆうで治をさむ

麒麟きりんかな

鳳凰ほうわうや

瑞兆ずいちょう告つぐる

時ときの聲こゑ

時空じくう超こえ

永遠えいゑんに羽搏はばたく

不死鳥ふしちょうか

竜門りゅうもんの

滝たきに挑いどむや

真鯉まごいかな

大空おほぞらへは

もう一ひと飛躍とつとくの

始祖鳥しそちょうか

若き日や

樹海彷徨ふ

心かな

常なしと

沙羅双樹の

花の色

菩提樹の

下で悟るや

釈迦の空

悟り得て

叡知働く

思索かな

生命は

進化するぞと

種の起源

あとがき

あどがき

さて、書き終えてみて、幾つか書き残したことがあるので、それを少し書き留めておきたいと思う。例えば、「目に涙、浮べて産むは、生命かな」という小品があるが、この場合、カメは、目に涙を浮かべているのではなく、実は、余分な「塩分」を外に出しているだけだというのが、今日の「科学的な解釈」になるかと思う。それでは、なぜ、敢えて「目に涙、浮べて産むは、生命かな」ということにしたのかと言えば、それには次のようなはつきりとした理由があるからである。――例えば、虫であれば、ほとんどの場合、卵を産み終えると、やがて死んでしまうものであり、また、サケなども、大変な苦勞をして生まれ育った川へと遡上し、やがて、そこで産卵をして死んでしまうものである。それは、海ガメでも、基本的には全く同じことであり、遙か遠い海からわざわざ産卵のために、身の危険を冒してまでも、生まれ育った浜へと卵を産みにやってくるわけである。そのように、いわゆる「生命を産む」というのは、目に涙を浮かべるどころの段ではなく、ほとんど「命を賭けなければならぬ行為」になるわけである。それは、犬や猫などの哺乳類の場合でも、また、われわれ人間の場合でも、基本的には全く同じことが言えるわけである。つまり、海ガメが、目に涙を浮かべて卵を産むという姿は、いわゆる「生命を生み出す」ことの「重み、や苦勞」というものの極めて象徴的な「姿」であり、それゆえ、たとえそれが「科学的事実」ではなくても、いわゆる「芸術的真実」として成り立つものなのである。

次に、「俳句」とは、一体、何かという問いに対して、それは、「小説」で言えば、いわゆる「私小説」であり、その人自身が見聞き経験したことなどをもとにして、その時の「実感」の「情景」を、いわゆる「五・七・五」で表現するのが、まさに「基本的な姿」になるかと思う。もちろん、それは、それで「重み」のある世界ではあるが、ただ、小説という「形式」で表現できるものは、何も「私小説」だけではなく、例えば、歴史小説もあれば、また、推理小説もあり、その他、実に様々なものが表現できるのとまったく同じように、「五・七・五」という形式で表現できるものは、何も「俳句」や「川柳」だけではなく、例えば、象徴詩、標語、その他、どのようなものでも表現でき得るものである。それが、すなわち、「三行詩」（「五・七・五」詩）であり、「三行詩」（「五・七・五」詩）というのは、「五・七・五」の形式で書かれたものの『総称』であり、それゆえ、「俳句」も「川柳」も、まさに「三行詩」（「五・七・五」詩）のなかに入るものである。つまり、どこに「重点」を置き、何を「表現」するかによって、それぞれ「俳句」にもなれば、「川柳」にもなり、また、「象徴詩」にも、「標語」にも、その他、どのようなものにもなるということである。

それでは、この本で書かれている「三行詩」（「五・七・五」詩）は、具体的には、一体、どこに「重点」を置き、何を「表現」しているのかと問われれば、主に動物や植物などを中心とした内容になっているので、敢えて言えば、「動物詩」や「植物詩」ということになるのかも知れないが、もちろん、そういう名称は、どうでもよいことであり、大事なことは、自分と対象がある場合、自分の方ではなく、むしろ対象の方に重点を置き、そして、その対象の特徴をとらえて、その「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命」にふれるということに重点があるということである。それに加えて、それを読む人が、心の底から「共感・

共鳴」でき得るような「客観性や普遍性」なども、含んだものでなければならぬということである。もちろん、それは、一つの「表現方法」に過ぎず、例えば、『象徴詩』であれば、外界の対象は、自分の「心象風景」を表現するためのいわば「素材」に過ぎず、表面的には動植物や自然の風景などを描いていても、その実は、その人の「心象風景」を描いているということにもなるわけだ。それは、自分と対象とがある場合、自分の方に重点を置いた表現になるということである。つまり、どこに「重点」を置くかによって、その「表現内容」は、それぞれ違ったものになるのは、当然のことであり、この本の場合には、自分よりも動植物のほうに重点を置き、その対象の特徴をとらえ、そして、その対象の「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命」にふれるというところに、最大の重点が置かれているということである。

最後に、「詩歌」は、ただ単に「眼」でその文字を追うだけではなく、むしろ声に出して読むことが大事であるとともに、頭の中で何度も何度も「暗唱（吟味）」してみることによってこそ、初めて、自らその作者自身の「心的状態」ともなつて、その「詩歌」の真の「意味合い」や「生命」などにもふれることができ得るということである。

平成二十八年九月吉日（決定版）

如月翔悟